



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第15回北海道農業経済学会報告要旨（その二）
Author(s)	渡辺, 侃
Citation	季刊農業経営研究, 4, 91-91
Issue Date	1958-05-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36267
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_91.pdf



畜牛部門をもつところの玉蜀黍地帯の農場類型は全て、1952年から53年にかけて生じた旱魃によつて、直接、間接に酷い影響を受けた。大部分の家畜飼養地域（Livestock areas）においては、例年より多くの頭数を可成り廉価で販売しなければならなかつた。廃乳牛（Discarded dairy cow）の受取価格は良質の牛（Better grade of cattle）の受取価格以下であつた。

1952年と53年の両年の換金穀作農場における

経営主とその家族の労働時間当りの収益は玉蜀黍地帯のなかで最も多かつた。しかしながら、経営主とその家族の年間労働総収益は1952年においては第2位であり、1953年においては第3位であつた。1953年においては豚～肉牛肥育農場の年間収益が最も多く、豚～酪農場が第2位であつた。

（註）残りの農場類型についての検討の部分は紙面の関係で割愛した。

第15回 北海道農業経済学会報告要旨 （その二）

獨逸の貴族主義

渡 辺 侃

ワルター・ゲーアリッツの著書、*ユンケア、貴族農業者*、（Walter Gorlitz: Die Junker, Adeln, Bauer 1957）は、獨逸の国状と心情の内に根を張つてゐる貴族主義の歴史と伝統を書いた、興味あるものだ。ユンケアはユング・ヘアすなわち若殿の意味で、獨逸の帝王からその東北（エルベ河以東）に封地を与えられ、農場経営をし、政界や軍隊に出た貴族階級である。その農場は大きく、其の経営は、農産製造（馬鈴薯火酒醸造・甜菜製糖等）と結びつけ、合理化の途を進んだ。農学を基礎づけ

た人々、テアー、フォン・チューネン、フォン・リビツヒ、フォン・デア・ゴルツ等も此の階級の人々である。ファン・デア・ゴルツの家名は実に13世紀に遡るもので、其家系から將軍・政治家・財政家・外交官の著名の人々が出てゐる。貴族の下に騎士リツテアがつきその下に原住民のスラブ族や内国植民で入れたゲルマン族の労働者がついて大農が成立した。その状態は小農経営なラインランド、ホランド（和蘭）、ダンマルク（丁抹）より更にフランスの状態と異つてゐる。

プロシアが獨逸を統一したのはこれら貴族及び従士の力であつて、フランスを征伐したが、第1及び第2の世界大戦で先ず

英國、さらに米國また露西亞から抵抗された。ヒットラーは貴族でなかつたが、血統的貴族主義であつた。それが倒されても、今日なお貴族的な心情が絶えてはいない。

それがよいか悪いかの批判をするのではない、報告者は英國の中産階級 Roy Lewis & Angus Moude; *English Middle Classes* (1959) を講読したことがある。その本を評してスノブ（Snob, 貴族になりたがる人）がスノブのことを書いた、スノブのための書だとしたものがある。スノブの反対にスプロル（Sprol, 無産者になりたい人）が今の日本には多いようだ。